

医療保健学部の学生の皆さんへ

「平成29年度医療保健学部授業評価アンケートの結果について」

つくば国際大学医療保健学部FD委員会

本学医療保健学部の「授業評価アンケート」は、『学生の取り組み』、『教員の授業展開』、『自由記述』より構成されている。各学科では授業改善を目的に、「授業評価アンケート」結果を基に、各学科でそれぞれの授業について、「前年度からの工夫」、「その結果」、さらに「次年度に向けての改善策」を検討し、単純集計結果とともに大学HPに掲載している。

平成29年度の学生の「授業評価アンケート」結果について、前期・後期別、講義科目・実験実習科目別に報告する。()に平成28年度のアンケート値を示す。

I. 学部・学科別の報告

平成29年度 医療保健学部の授業評価アンケートの総評

医療保健学部長

宮崎 泰

1. 「授業評価アンケート」の実施率

前期講義科目の実施率は、「基礎科目」89.5% (90.5)、「専門基礎科目」64.0～100% (63.6～100)、「専門科目」60.9～100% (62.5～100)であった。実験実習科目の実施率は、「専門基礎科目」100% (83.3～100)、「専門科目」57.1～100% (100)であった。

後期講義科目の実施率は、「基礎科目」88.2% (88.6)、「専門基礎科目」65～100% (69.2～100)、「専門科目」67.5～100% (70.0～100)であった。実験実習科目の実施率は、「専門基礎科目」85.7～100% (66.7～100)、「専門科目」75.0～100% (83.3～100)であった。学科によって“ばらつき”があった。

2. 「学生の取り組み」と「教員の授業展開」

[前期]

1) 学生の取り組み

「1：遅刻せずに出席できましたか」、「2：積極的に授業に参加しましたか」、「3：授業中に私語を謹んでいましたか」は、講義科目 4.39～4.64 (4.36～4.65)、実験実習科目 4.31～4.71 (4.23～4.68)であった。「4：事前にシラバスを読み、授業に臨みましたか」は、講義科目 3.46 (3.31)、実験実習科目 3.65 (3.53)であった。「5：オフィスアワーを活用しまし

たか」は、講義科目 2.49 (2.41)、実験実習科目 2.81 (2.67) であった。「6：この科目の自己学習時間は、1週間に平均何時間でしたか」は、講義科目 2.28 時間(2.20)、実験実習科目 2.67 時間 (2.53) で講義科目、実験実習科目ともに前年度よりも多くなっている。「7：総合的にみて、あなたの学習への取り組みに満足していますか」は、講義科目 3.66 (3.65)、実験実習科目 3.92 (3.85) であった。「学生の取り組み」については、殆どの質問項目で前年度よりも高い評価を得ていた。

例年、課題として挙げられている質問項目の「5」と「6」については、学科間、科目間で“ばらつき”があった。「5：オフィスアワー・・・」については、前年度よりも幾分高い評価を得ているが、指定されている時間帯に質問に来る学生は少ないとの意見が多い。一方で、特定の時間や場所にかかわらず学生の質問を受け入れる工夫をしている学科もある。授業時間外で個別指導を行っている学科も多く、質問項目「5」については質問内容についての検討が必要である。「6：・・・自己学習時間・・・」については、学習時間が幾分長くなっている。自己学習時間を増やすための取り組みは学科によって様々であった。具体的には、予習用・復習用資料の配布、小テスト・中間テストの実施、アクティブラーニングの導入、課題シートの作成・配布、使用資料の初回配布、学生と教員との質疑応答や口頭試問の実施、参考資料のネット配信と実習レポートのオンライン提出及びオンライン返却、等多彩な対応がみられた。

自己学習時間は、『教員の授業展開』についての質問項目と強く関連しており、前期・後期ともに自己学習時間は講義科目の方が実験実習科目よりも少ない。3時間以上の自己学習がみられた学科は、診療放射線学科の実験実習科目 3.24 時間と医療技術学科の実験実習科目 3.59 時間であった。講義科目についてより工夫が必要である。

2) 教員の授業展開

13項目の学部平均値は、講義科目では 3.91～4.35 (3.87～4.31) で、「8：教員は授業の時間外でも学習相談にのってくれましたか；3.91 (3.87)」以外は全て 4.0 以上であった。

実験実習科目では、4.19～4.44 (4.06～4.40) で、全ての質問項目で平成 28 年度よりも高い評価を得ていた。

【後期】

1) 学生の取り組み

「1：遅刻せずに出席できましたか」、「2：積極的に授業に参加しましたか」、「3：授業中に私語を謹んでいましたか」は、講義科目 4.41～4.59 (4.37～4.59)、実験実習科目 4.29～4.68 (4.22～4.66) で、平成 28 年度よりも高い評価を得ていた。「4：事前にシラバスを読み、授業に臨みましたか」は、講義科目 3.53 (3.41)、実験実習科目 3.60 (3.48) であった。

「5：オフィスアワーを活用しましたか」は、講義科目 2.71 (2.59)、実験実習科目は 2.82 (2.69)、であった。平成 28 年度と比べ向上している。「6：この科目の自己学習時間は、1週間に平均何時間でしたか」は、講義科目 2.47 時間(2.41)、実験実習科目 2.82 時間 (2.56)

で、講義科目、実験実習科目ともに向上している。3時間以上の自己学習がみられた学科は、看護学科 3.00 時間、診療放射線学科 3.36 時間、医療技術学科 3.95 時間で、全て実験実習科目であった。「7：総合的にみて、あなたの学習への取り組みに満足していますか」は、講義科目 3.79 (3.65)、実験実習 3.91 (3.82) であった。学生の取り組みについては、殆どの質問項目で平成 28 年度の評価値よりも高い評価を得ていた。

2) 教員の授業展開

13 項目の学部平均値について、講義科目 4.05～4.38 (3.99～4.36) で高い評価を得ていた。「8：教員は授業の時間外でも学習相談にのってくれましたか；4.05 (3.99)」についても高い評価を得ていた。実験実習科目では 4.18～4.45 (4.10～4.45) で、平成 28 年同様に全ての項目で 4 以上の高い評価を得ていた。

3. 総評

「授業評価アンケート」の実施率は学科によって差があるので、実施率を上げるための検討が必要である。

「学生の取り組み」に関する質問項目の「5：オフィスアワーを活用しましたか」と「6：この科目の自己学習時間は、1週間に平均何時間でしたか」については、研修会等によって全学的な検討が必要である。

「教員の授業展開」に関する 13 項目については、殆どの科目で評価値は 4 以上の高い評価を得ていた。当面は、これらの評価値を維持・向上させるための更なる授業改善に取り組む。

新たな学科が開設されたことから、アンケート項目の検討を行う必要がある。

以上

平成 29 年度 理学療法評価の授業評価アンケート報告

理学療法学科

学科長 林 隆司

1. 前年度からの工夫事項

例年課題となっている自己学習の時間の少なさに対して、今年度も自己学習の時間を促す取り組みや、補習や予習の促進の取り組みが多くみられた。具体的には、任意提出の課題シートを作成・配布して、学生の自己学習の時間を促したり、授業で使用する資料(プリント)を全て授業の初回に配布すること、自己学習用のドリルの作成などの教材の作成・配布のほか、シラバス事前説明、各授業における学習のポイント説明、放課後に毎日オフィスアワーを設けて質問に対応するとともに、設定時間外においても可能な限り学生対応を行ったことなどである。

学習効果の向上を目指した工夫も多くみられた。具体的には、豆テスト(小テスト)の中で寄せられた質問を次回の講義の最初に解答とともに紹介したり、最新の知見を授業に組み入れたり、出席管理表に感想や質問を書いてもらい次回の講義で全体にフィードバックを行ったことなどがある。また、授業の後にリアクションペーパーを配布して、授業で理解したことや質問を記入して学生の理解度を確認したり、授業において、学生に頻繁に話しかけて学生が興味を持ち続けられるようにしたことである。演習や実習科目においては、アクティブラーニングを積極的に導入することや、教員による臨床経験の提示や演習などで学生の興味を持たせる工夫が多くみられた。また、Google の classroom 機能などの IT を活用した授業展開がみられた。

2. 本年度のアンケート結果

本年度もほぼすべての科目において自己学習の時間の少なさが指摘されている。その反面、多くの科目において全体的に学生の評価が高くなっていることから、前年度の授業の工夫の効果が得られていると考えられる。自己学習の時間の低さについては、事前に次回の講義のプリントを配布して予習を促したり、復習用のドリルや小テストの実施などで自主的な学習を促す仕組みを取り入れた科目が多くあるが、十分に効果がみられた科目は少なかった。教員のコメントとしては、予習や復習用のプリントを配布しても忘れる学生が多くいたり、理学療法学科の学生は他学科の学生と比べて授業への関心度が低いとの意見、単位が取れなくてもいいとの意識がある可能性が指摘されている。また、シラバス確認の必要性を各科目で指摘しているにもかかわらず、確認の項目が低値になるのは、シラバスの必要性の認識が甘いのではないかとの意見もある。逆に、シラバスの確認をした学生が 7 割以上の科目もあった。

学生側の課題も多く上がっていた。例えば、学生が高校で履修していない科目や、学生の基礎学力に差があり一律の教材での学習が困難であった科目も複数あった。また、授業スライドは教科書の要約であるにもかかわらず、すべてを書き写そうとして授業の展開についていけなくなる学生の指摘もあった。

3. 次年度に向けた改善策

科目間の課題がいくつか指摘されていた。例えば、科目間のつながりの不適合や、履修学年と科目内容の不適合を指摘する科目が複数あり、カリキュラムの見直しが必要だと思われることや、非常勤講師が含まれる科目については、科目責任者が今以上に積極的に連携を図る必要性が指摘された。具体的には、昨年度の試験問題や、学生の授業評価アンケート結果などを事前に郵送して意見を求めたり、非常勤講師への質問については科目責任者が仲介することや、期末試験問題は前年度と同じにならないように依頼することなどである。

自己学習の時間の促進については、中間試験を早めに行うことや、高校の内容を含んだ自己学習教材や課題の提示、補助教材の配布などの工夫が提案されている。

学生の講義への興味・関心を引く取り組みとしては、学生と対話型で疑問を掘り下げるような授業展開を行うこと、冗長な説明ではなく、簡潔な説明を心がけること、動画やカラー映像などの教材の工夫をすること、逐次授業内容をアップデートして最新の知見を組み入れること、などの工夫が指摘された。

IT活用については、Googleのclassroom機能をさらに充実させることが提案されている。
以上

平成29年度 看護学科の授業評価アンケート報告

看護学科

学科長 関 千代子

1. 前年度からの工夫事項

1) 講義科目

- ・ パワーポイントの使用は多科目に及んでいる。スライドは学生が授業を受けながら記述できるように空欄を設けるや、写真や映像を多く取り入れている。
- ・ 事前課題や講義後にレポートの提出を求めることで知識の定着を図り、学生にフィードバックすることで強化している。
- ・ 授業内でミニテストを実施し知識の確認を行いながら授業を展開している。
- ・ 講義直後にリアクションペーパー（受講確認併用）を提出させ、授業の振り返りに活用し、次回の授業を展開している。
- ・ 小グループによるディスカッションや発表を多数取り入れている。その過程で出現した課題を、学生自らが考え解決に導けるように取り組んでいる。
- ・ 講義中に教員の臨床経験や学生の実習体験を紹介することで、抽象的な概念がより理解しやすいようにしている。

2) 演習・実習科目

- ・ 演習にグループディスカッションやロールプレイを取り入れるなど、アクティブラーニングを意図した科目が多い。
- ・ 講義と演習が繋がるように順序性を考慮している。また、理学療法科教員の協力を得て演習を行い、本学の特色を生かした演習になるよう努めている。
- ・ 臨地での実践活動が具体的に想起できるような工夫をしている。
- ・ 看護管理場面をPDCAサイクルに基づき、実践に近い演習を行っている。また、学生のイメージ化を図ると共に、グループワークやディスカッションを取り入れ主体的な学びが出来るようにしている（公衆衛生）。
- ・ 看護技術の習得に向けて小人数での技術教育を行うと共に、授業時間外を活用しながら個別指導を実施している（基礎看護）。

2. 本年度アンケート結果

1) 学生の取り組み

- ・ 項目毎の評価は学科の平均点～平均点以上の科目が多く、特に出席率は高値を示した。しかし、「オフィスアワーの活用」や「自己学習時間」が低評価の科目があった。この2項目の評価が高い科目は、テーマ決定から発表会の運営までを学生が主体的に関わっていたので満足度も含めて高評価だったのではないかと推測する。また、課題レポートの量が適切だったので高評価だったのではないかとの意見もあった。
- ・ グループワークやディスカッションを取り入れた科目に、「授業中の私語を慎む」が学年平均より低い傾向がみられたが他の項目は全て高評価であった。これは積極的に発言することを推奨した結果であり、「総合的満足度」や「授業内容の理解」が高評価であることを加味すると授業の工夫は効果があったと考える。

2) 教員の授業展開

- ・ 昨年同様、総合的に肯定的な評価が得られている。授業の難易度が高い科目においても「総合的満足度」や「授業内容の理解」などが高得点であり、教員の授業に対する工夫の効果があったと考える。
- ・ 1科目の中で毎回、講師が異なりその講師のペースで授業が展開される科目は、すべての項目が学科平均を下回っていた。1回毎に講師が異なる科目を科目全体の授業評価に繋げることには無理があると考えます。
- ・ 学期の途中で教員の欠員が生じた科目は、急遽、授業担当の変更を余儀なくされたが、学生は集中して学ぶことが出来ていた。

3. 次年度に向けた改善策

- ・ 「自己学習時間」と「オフィスアワーの活用」が低値であるため、学生の主体性が養われるような教授方法を継続して工夫していきたい。
具体的には、「自己学習時間の低値」に対して学習課題を明確にし、事前・事後学習の充実を図り、自己学習活動が出来るように支援する。さらに、事前学習を授業に繋げ、参加型の授業をすることで学生の学習意欲を向上させる。また、一部で実施されているシミュレーションや体験学習を取り入れた、アクティブラーニングを実施することで学修意欲が向上するように努める。「オフィスアワーの活用」については、学生に教員の在室時間を詳細に掲示するなど、周知徹底を図りさらなる充実を図りたい。
- ・ その他、授業目的が達成され、効果的な演習が出来るように地域実習室の環境をより良く整えていきたい。

以上

平成29年度 保健栄養委学科の授業評価アンケート報告

保健栄養学科
学科長 武 敏子

1. 前年度からの工夫事項

それぞれの科目担当教員は昨年度の授業評価アンケートの結果を基に工夫をしている。平成29年度は媒体とその使用法、理解しやすい方法などの工夫がみられた。例をあげると、次のようなものがある。

1) 授業前の工夫

- ・学生の自己学習を促すための課題シートを作成・配布し、学生の自己学習を促す試みをした。
- ・予備学習を促すため、授業で用いる資料（プリント）をすべて授業の初回に配布した。
- ・前回授業の復習をした。

2) 授業時の工夫

- ・管理栄養士国家試験出題基準を十分に網羅するようにした。
- ・学生の集中力が低下してきたら、問題演習を行って気分転換を図るとともに、学習内容の整理と再確認を行った。
- ・DVD教材による動画を使用し、より実際的な内容にした。
- ・教科書の内容をスライドにまとめて、そのスライドを印刷して配布してノートに写すことばかりに労力を割かないようにした。
- ・専門用語はできるだけわかりやすい解説を加えて丁寧に説明した。
- ・授業内容はパワーポイントで説明し、パワーポイントにはアニメーションを取り入れ大切な個所を強調するように工夫した。
- ・実験手順をスライドやプリントで詳しく示すことで、実験がスムーズに進められるようにした。
- ・管理栄養士国家試験の問題をグループで解き、解説を学生にさせて教員が修正・補足した。
- ・教員が話すだけでは、学生があきてしまうので、プリントに書き入れて、重要な点を明らかにして覚えるようにさせた。
- ・授業の内容の実際を現場体験することで理解を深めるようにした。
- ・少人数を活かし、グループワーク等の際に全体で会話が進むように教員側も参加して行った。
- ・授業の内容の主要な部分はプリントに記載した。特に、表、画像、写真等を多用し、視覚に訴える内容とした。

- ・資料やパワーポイントのスライドなどはその都度微修正しわかりやすい内容にするよう努めた。
- ・オリジナルの講義プリントを作成し、理解度をチェックしながら授業を進めた。

3) 授業終了時の工夫

- ・毎回、学習した範囲から問題を作り復習テストを実施している。
- ・授業の終わりに当日の授業内容の小テストを行い、理解度との確認と復習の機会を作るようにした。
- ・授業の最後に国家試験の過去問を小テストとして解き、過去問に触れる機会を作った。
- ・実習最終回にシラバスの到達目標に対して、学生がどのくらい達成感を得ているのか自己点検表に記録してもらい、クラス内の到達感をグラフ化している。
- ・昨年度の評価で実習授業の終了時間が遅くなるとのことだったため、少し早めに終わるようにした。
- ・パワーポイントのスライドについては、PDF ファイルに変換し、Google の Classroom 機能を活用して、授業終了後に公開した。

4) その他

- ・毎日放課後（18:00～19:30）にオフィスアワーを設けた。

2. 本年度のアンケート結果

アンケート結果の分析方法として、昨年度と比較している教員、平均点と比較している教員、3以上を合格点として人数の割合で分析している教員、3以下を問題として人数で分析している教員、期末試験を評価に入れている教員、それぞれである。いずれも授業内容とその理解度を見ている。

1, 2年生は理解度もよい科目が多く、また、実験実習科目も理解度が高いようである。専門科目になると少し理解度に幅があり、低いものについては改善を検討していくものと思われる。

全体的には高評価傾向ではあるが、オフィスアワーの活用は毎年ながら低い結果となっている。

3. 次年度に向けた改善策

多くの改善策や続行内容が述べられているが、例をあげると、次のようなものがある。

- ・ 毎回授業のはじめに主題や到達目標を確認する。
- ・ 学生の理解度を確認しながら授業を進める。
- ・ 今後もさらに一層学生が主体的に参加できる授業を展開していきたい。
- ・ 理解を深めるため丁寧な説明を行う。
- ・ 自己学習時間を増やすための工夫として、教科書の内容について事前学習をさせ、授業の初めに課題を行うようにしたい。

以上

平成29年度 診療放射線学科の授業評価アンケート報告

診療放射線学科

学科長 村中 博幸

1. 前年度からの工夫事項

昨年度の改善策として挙げられていた3つの事項については、一部の授業科目で改善が見られた。

1) 授業内容の確認と理解

学生はシラバスを読んでいない傾向が強いため、各授業の授業開始時にシラバスを持参させ内容についての説明を行っている。全ての科目で学習内容と到達目標を明確に提示している。到達度確認のため小テストや中間試験を行う授業も多く見られた。

2) オフィスアワーの活用

オフィスアワーの活用については、学生の主体性を重んじながらも、教員がいつでも門戸を解放していることを繰り返し説明している。授業で分からないところがあれば、個別に研究室を訪問するよう伝えているが、初年度に比べ学生の訪問が徐々に少なくなっている傾向が見受けられた。

最近の傾向として、国家試験に直接関係する科目であれば、質問に来る学生は増え、自主学習の時間も増えている。新しい取り組みとして実験内での質問事項を充実させ、学生への理解を深めオフィスアワーが促進される授業もあった。

3) 自主学習の時間不足

学習時間の不十分さも、全体的には多くの学生の傾向に見受けられる。逆転の発想で、授業時間中に必要項目をしっかりと記憶してしまうことを推奨している。当日のキーワードや重要項目を、授業の最初や最後に繰り返し活用することで学習時間の不足を補填する。テキストで良く出題される文章や文言については、その箇所にペンで下線を引かせ

て、出来るだけ学生に注意を促すようにする。小テストや中間試験で重要なポイントを提示し、理解度を確認するなど工夫していた。

配布資料やプレゼンの工夫では、毎回配布するレジュメに大きく表示したり、文字に色付けしたり、フォントやサイズを調整したり、穴あき箇所に単語を記入させるなど、重要性を体感的、視覚的に理解出来るように工夫していた。なるべく学生の興味を引くように、臨床画像を多く提示する、専門性を持つ外部講師の講義を講師として招聘するなどの授業もあった。また、学生が少人数の場合は、個々に理解出来ていない部分を聞きながら学生のレベルに合わせて講義を行っていた。

授業毎に 10 問程度の国家試験出題基準に則した小テストを実施する、授業内容に関する宿題を出す事など、復習の大切さを促し、最低でも復習に 1 時間以上は費やすよう理解を求め、学習時間の増加が見られた授業もあった。

2. 本年度のアンケート結果

1) 学生の取り組み

授業内容の理解度や満足度については殆どの科目で 4 点以上であったが、昨年度の改善策として挙げられていた 3 つの事項については、自己学習時間についても国家試験に直接関連する一部の授業を除き、大きな改善は見られなかった。全体的に学生は常に受け身であり、積極性があまり感じられない。授業の復習についても殆ど行っていないため、小テストや中間試験を行う授業も多く見受けられた。小グループでの学生間の話し合いや発表など教員もあの手この手で学生の興味を引き出そうと努力しているが、根本的な解決には至っていない。

2) 教員の授業展開

教員の授業展開については、様々な工夫をされているので総合評価は良い。しかし、オフィスアワーの活用は一部の授業科目のみ改善されているが、殆どの授業科目で改善が見られない。特に学科以外の教員の場合は、相談しにくい環境もありオフィスアワーは皆無であった。

放射線治療や核医学、MRI などは学内に装置もなく座学中心の授業となるため学生の興味も薄れている。これらハード面の問題は解決不可能な状況である。

3. 次年度に向けた改善策

1) 学生の基礎学力の底上げと学習意欲の向上

次年度の改善策として先ず、学生の基礎学力の底上げと学習意欲の向上を図ることを目標とする。授業で重要な内容については、学生に記述をさせ、配布資料を見やすくする。更に、教員間の連携を密にし、情報を共有する。授業欠席についても学科内で情報共有出来るよう、学生への注意も全教員がメール内容で確認する。

2) オフィスアワーを活用し、学生との関わりを増やす。

オフィスアワーの活用は従来の待機型では効果が認められないため、教員から積極的に発信し、学生を取り込むように改善する。

3) 自己学習の強化

自己学習の強化については、双方向で学習する授業スタイルを検討する。学生になるべく考える時間を持たせるようなグループ学習や課題の提供、特に国家試験に直接関連する内容については、重点的に行う。

以上

平成29年度 臨床検査学科の授業評価アンケート報告

臨床検査学科

学科長 幸田 幸直

1. 前年度からの工夫事項

講義科目においては、これまでのようにパワーポイントの利用が主流であるが、画面は文字を主体にするのではなく、イラストや写真を主体として視覚的に理解を向上させる工夫が見られた。また、パワーポイントの画面内容に連動したプリントを配布することや教科書の重要部分をまとめたプリントを配布すること、国試の過去問題を解説することなど、学生の書写の負担を減らし、より教員の話に集中できるような工夫がなされていた。併せて、教科書に示されている図表をパワーポイントで投影し、教科書そのものに書き込みができるようにして、後に教科書をベースに復習ができるようにする工夫も見られた。

板書されたものを適切にノートに書写しているか、重要部分を教科書に適切にマーキングしているかなどを、教室を回りながら確認するとともに説明を加える、いわゆる立体授業を行う工夫も見られた。さらに学生が眠くならないように臨床での経験を織り交ぜて関心を持たせる工夫やネットを使った宿題の提出とチェックを行う工夫、配布プリントのフルカラー化で病理染色、細胞像、微生物染色などの重要部分を理解させる工夫、授業開始時に小テストで前回授業の振り返りを行う工夫、授業終了時に次回授業資料を配布して予習を促し、その次回授業で学生が自分の意見を発表するというアクティブ・ラーニングの試みもあった。

このように、学生の書写負担を軽減すると同時に、教員の話しに集中できる環境づくりが行われていただけでなく、立体授業やアクティブ・ラーニングなど、より学生が主体的に参画する授業づくりに努力が払われていた。

実習科目においては、一操作手順毎に学生全員に同時に実施させ、誤りやリスクを減ら

す工夫、スマートフォンでブタやウシの臓器の顕微鏡写真を撮影し、その画像を見ながら教員と学生が臓器構造についてディスカッションする工夫などが行われていた。また測定終了後に全体検討会を行い、学生と教員で質疑応答や口頭試問を繰り返す工夫、当該科目専用のホームページを開設し、参考資料をネット配信し、実習レポートはオンラインで提出、オンラインで返却するというレポート作成支援の工夫など、多彩な工夫が実施されていた。

演習科目においては、通常のCPCとは逆のR-CPC（Reversed Clinico-Pathological Conference）を実施した試みがあった。

2. 本年度のアンケート結果

アンケートで重視される教員の授業展開として「総合的な授業の満足度」については、おおむね良い評価が得られており、4.63や4.69と高い評価の得られた科目があった。また「積極的な授業への参加」についても、おおむね良い評価が得られており、中には4.80や4.71などという評価があり、学生の出席状況は良いようである。しかしながら、「オフィスアワーの利用」については、2.78や2.53と低く、さらに「自己学習時間」については、2.16や2.22などと一段と低く、ほとんど自己学習をしていない学生もおり、自己学習による学習内容の定着が図られておらず、勉学意欲の低さが垣間見られる結果となった。教員の積極的な授業工夫が、学生には受け止められていない結果となっていると考えられる。

また、オフィスアワーを利用して教員訪問をした学生が全くいなかったにもかかわらず、「ややあてはまる」と記した学生が23.1%もいたという授業科目があり、評価アンケートの信頼性に疑問を呈する結果となった。

3. 次年度に向けた改善策

毎年、各教員はそれまでの経験に基づき、新たな工夫をさまざまに展開しており、アンケート結果からもそのことは読み取れる。しかしながら、学生のオフィスアワーを利用した教員訪問や自己学習時間の増大という積極性と自学自習の習慣については、一向に改善していく気配が見えないのは、疑問をそのままにしては気持ちが悪く、何とか解決したいという気持ちや勉学に対する楽しさを見いだせないままに大学に進学した学生がかなりいるのではないかと思われる。ただ個別的には、積極的に教員を活用し、自習もしっかりとしている学生が、少数ではあるがいることが救いである。

毎年のものであるが、多くの学生は授業に出席しているだけで、それ以外に教員との接触もなく、自習もほとんどしない学生であり、オフィスアワーとは何かをも理解していない学生がいることは確かである。オフィスアワーについては、シラバスに公表している日時だけでなく、可能な限り学生の都合も考慮する方策をとっている教員が多いので、4月のオリエンテーションの際に積極的に学生に周知する必要があると考える。

一方で、自宅での学習の促進を図るためには、積極的にレポート課題を課すことも必要ではないかという意見、コミュニケーション能力不足の学生が多いことから、双方向授業を積極的に展開することが必要ではないかという意見などがあり、各科目の特徴に応じての改善策を各担当教員が立てているので心強い限りである。

実習においては、顕微鏡観察にスマートフォン撮影を導入した効果が高かったことから、今後は拡張して実施するとした意見があり、実習に限らず電子機器の積極的な活用が学生の理解の向上につながっていくものと考えられる。

以上

平成29年度 医療技術学科の授業評価アンケート報告書

医療技術学科

学科長 石山 陽事

1. 前年度からの工夫事項

1) パワーポイント（以下P-P）を使用しない授業：

前期授業科目について：

- ① 板書きの書き方に関する指摘に対応するため、周回授業の中でマイクの使用方法を工夫し。かつ丁寧に出来るだけゆっくりと板書をするように心がけた。
- ② 第2種 ME 技術試験や次年度に実施予定の実習科目がスムーズに移行できるように、なるべく平易な表現を用いて講義展開をするように心がけた。
- ③ 授業では計算問題を解くことを主眼として、毎回小テストを行い、解答方法をプリントおよび板書で詳しく解説した。
- ④ 学部学科の特性を考慮し、英語を理解するにとどまらず、本学図書館にある原書を自ら進んで読み、将来研究者としての第一歩を踏み出せるような授業展開とした。

後期授業科目について：

- ① 板書をきちんとノートしているか、指示した教科書の重要な箇所に線が引かれているかなどを授業中に周回してチェックするようにした。
- ② 毎回の授業内容の範囲から国試問題や第2種 ME 技術試験過去問を抽出したプリント資料を配り、授業終了時間の30分前に問題解説する授業スタイルをとった。
- ③ 板書が多いとの指摘もあったため、省略可能な部分については板書量の減少を図った。
- ④ 受講生の注意力を持続させる工夫として、講義中に質問を行い各テーマについて積極的に考えてもらう工夫をした。
- ⑤

2) P-P 使用による授業：

前期授業科目について：

- ① 基礎知識がほとんどない学生に対して、教科書に記載していない基礎的知識を配布資料に追加して理解の補助とした。
- ② 教科書の説明不足を P-P で補い、また毎回授業ごとに配布した P-P の穴埋め形式のプリント問題を学生自身が理解した上でプリントを完成できるよう工夫した。
- ③ 昨年度の授業評価アンケートを踏まえて、新たに小テストを導入した。すなわち教科書の1つの章が終わった時点で、翌週にまとめの小テストを実施した。
- ④ 学生の理解度に応じて、P-P や教材の内容を調整するとともに P-P では図表を多用した。また配布した教材は P-P のスライドに関する穴埋め形式とし少しでも授業内容に耳を傾けられるように配慮した。

後期授業科目について：

- ① 授業の冒頭に各回の学習内容を説明し、ワークシートを別に配布し特に重要なポイントを示したうえで授業を開始した。また P-P を用いて板書の書き写しではなく講義を聴くことに集中させるように工夫した。
- ② P-P と穴埋め記入方式の配布資料を併用し、特に配布資料は第2種 ME 技術試験や国試過去問題に関連した内容を抜粋した。穴埋め式にすることで学生の作業工程を増やし、講義への集中を図った。
- ③ 昨年の授業評価アンケートの結果を踏まえて、動画資料をさらに追加し学生の理解度の向上を目指した。
- ④ 授業に興味を持たせるために、自身の診療経験での体験談を適宜織り込みながら授業を行った。また配布資料と P-P で最後に当日の講義のポイントをまとめた。

2. 本年度のアンケート結果

1) 学生の取り組み

前期授業科目について：

- ① 授業態度や総合的に見た学習への取り組みについては概ね 4.0 前後と良かったが、授業内容の理解度については 3.5 前後と若干低かった。
- ② 特に自己学習時間については基礎専門・専門科目ほど低い傾向がみられ、1時間未満が半数近くを占めており、この結果は学生自身の学習への取り組みの満足度及び理解度に直結していると考えられる。
- ③ 例年低い傾向にあるオフィスアワーの活用については若干の改善が認められたものの平均 2 点台に留まった。

後期授業科目について：

- ① 「積極的な授業の参加」および「授業中の私語」などの項目についてはほぼ 4.5 前後と全体を通じて比較的良好、授業に集中できる環境を提供できたと考えられる。
- ② 前期授業と同様「オフィスアワーの活用」や「自己学習時間」については多くの科

目で低い評価となっていた。

2) 教員の授業展開

前期授業科目について：

- ① 「授業の構成」および「学生の理解度を把握しながらの授業」などの項目は専門科目も含めてほとんどの科目で 4.1 以上であり前年に比較して改善が見られた。
- ② 教員の「話し方の適切性」や「意欲や情熱」に関しても教科全体でも 4 点台のよい評価を得た。
- ③ 「総合的に見た授業の満足度」に関しても全体的に前年度より改善が認められた。

後期授業科目について：

- ① 「授業の構成」および「学生の理解度を把握しながらの授業」に加えて「授業内容は理解できたか」は全体に 4 点台以上で比較的よい評価であった。
- ② 学生の授業感想として ME 2 種問題の解説が役立ったとする反面、教科により P-P の文字の色や色使いが見づらい、文字が小さいなどの意見が出された。
- ③ 実習科目については総合的に見て 4 以上の評価を得たが、「教員の人数は配置」や「レポートの頻度、量、指導の適切さ」などで評点が低かった。

3. 次年度に向けての改善策

- ① 学生の取り組みについては自己学習時間が若干の改善傾向が認められたものの昨年同様専門科目ほど少ない傾向にあることから、特に専門実習科目についてレポート課題を充実させると共に、学生によるプレゼンテーションの機会を設けて学生が自発的に調べるアクティブラーニングの充実を図りたい。
- ② オフィスアワーの活用についても若干の改善があったが、十分ではないことから、指定されているオフィスアワーにこだわることなく、第 2 種 ME 試験対策および国家試験対策などと連動させて、学生が質問に来やすい時間環境の改善に努めたい。
- ③ 本学科も次年度は本格的な ME 2 種対策と国試対策をスタートするのを機会に、学生が自由にかつ積極的に勉学に励める学内スペースの確保と学生の質問に答えるべき目安箱等の設置なども考えて行きたい。

以上